

53) フォルヘー・コイターの解剖学

—研究対象の措定をめぐって

Volcher Coiter's Anatomy—Why did he dissect many animals?

京都大学大学院文学研究科博士後期課程 澤井 直

Tadashi SAWAI

フォルヘー・コイター (Volcher Coiter, 1533-76) は十六世紀後半に活躍した解剖家・医師である。彼はオランダのフローニンゲンに生まれ、イタリアで学び、ボローニャ大学の解剖学教授職に就いた。その後ドイツのニュルンベルクで医師として活躍をし、従軍中にフランスのシャンパーニュで客死した。

彼は故郷を離れて遊学する間に、モンペリエではロンドレ (Guillaume Rondelet, 1507-66)、パドヴァではファロッピオ (Gabrielle Fallopio, 1523-62)、ローマではエウスタキオ (Bartolomeo Eustachio, ca. 1519-74)、ボローニャではアルドロヴァンディ (Ulisse Aldrovandi, 1522-1605) やアランチオ (Giulio Cesare Aranzio, 1530-89) というような当時を代表する解剖家と親交を持ち、あるいは教えを受けた。コイターの著作にはこれらの解剖家の影響が見られる。逆にコイターの著作から当時の解剖学が一般的にどのようなものであったかを知ることができる。

医学史・生物学史におけるコイターの名は高いとは言いがたい。これは、彼がアカデミックな職に就いていたのが比較的短い期間であり、また祖国を離れて活動していたために、当時の研究に直接の影響を与えていないと考えられてきたことに一因がある。しかし発生学と比較解剖学の歴史においては高く評価されてきた。

アリストテレス以降で最初にニワトリの卵の継時観察を行ったのがコイターだった。この研究は師であるアルドロヴァンディに導かれたものとされている。コイターは権威の意見を鵜呑みにせず、自らの観察を重視するという態度で研究を行った。彼の観察対象あるいは研究態度は後のファブリキウス (Fabricius ab Aquapendente, ca. 1533-1619) やハーヴィー (William Harvey, 1578-1657) にも受け継がれており、コイターは近代発生学の礎を築いた一人として考えられている。

比較解剖学の分野でもコイターは近代の比較解剖研究の創始者の一人として扱われてきた。包括的な比較解剖学史を著した F. J. Cole は、コイターを比較解剖という分野そのものの形成に大きく貢献者として評価している。

このようにコイターは有名ではないが、近代の生物研究の興隆を扱う際には無視できない人物である。

コイターの研究は彼の二つの主要な著作に著されている。「人体の内部及び外部の主要な部分の図版」(1572) はニワトリの卵の観察や比較解剖についての記述が見られる。この著作に、四足動物と鳥類についての観察記述を加えて出版されたのが「ガブリエル・ファッロピオによる人体の同質部分についての講義」(1575) である。これらの著作の題を見て、コイターが高く評価されている発生学・比較解剖学の記述が含まれていると判断することは難しい。むしろ人体解剖についての著作と思われるだろう。

彼は発生学や比較解剖学の分野が形成される前の研究者なのである。解剖家としての彼の研究のある部分が、後に発生学や比較解剖学と呼ばれるようになった分野と対応しているのである。

本発表ではコイターがどのような考えに基づいて研究対象を選んだかについて扱う。特に人体についての関心との関連から、なぜ彼が多くの動物を解剖したのかを明らかにしたい。

近代初期の解剖学において、その研究の方法は一樣ではなかった。ヴェサリウスやコロンの世代が人体の構造を知るために人体解剖を行うことの重要性を示し、後にファブリキウスやハーヴィーは多数の動物に対する観察から動物全体についての知見を導いたのである。彼らの中間世代に当たるコイターの解剖対象の措定について検討することで、研究方法の推移の過程がより明らかになるであろう。